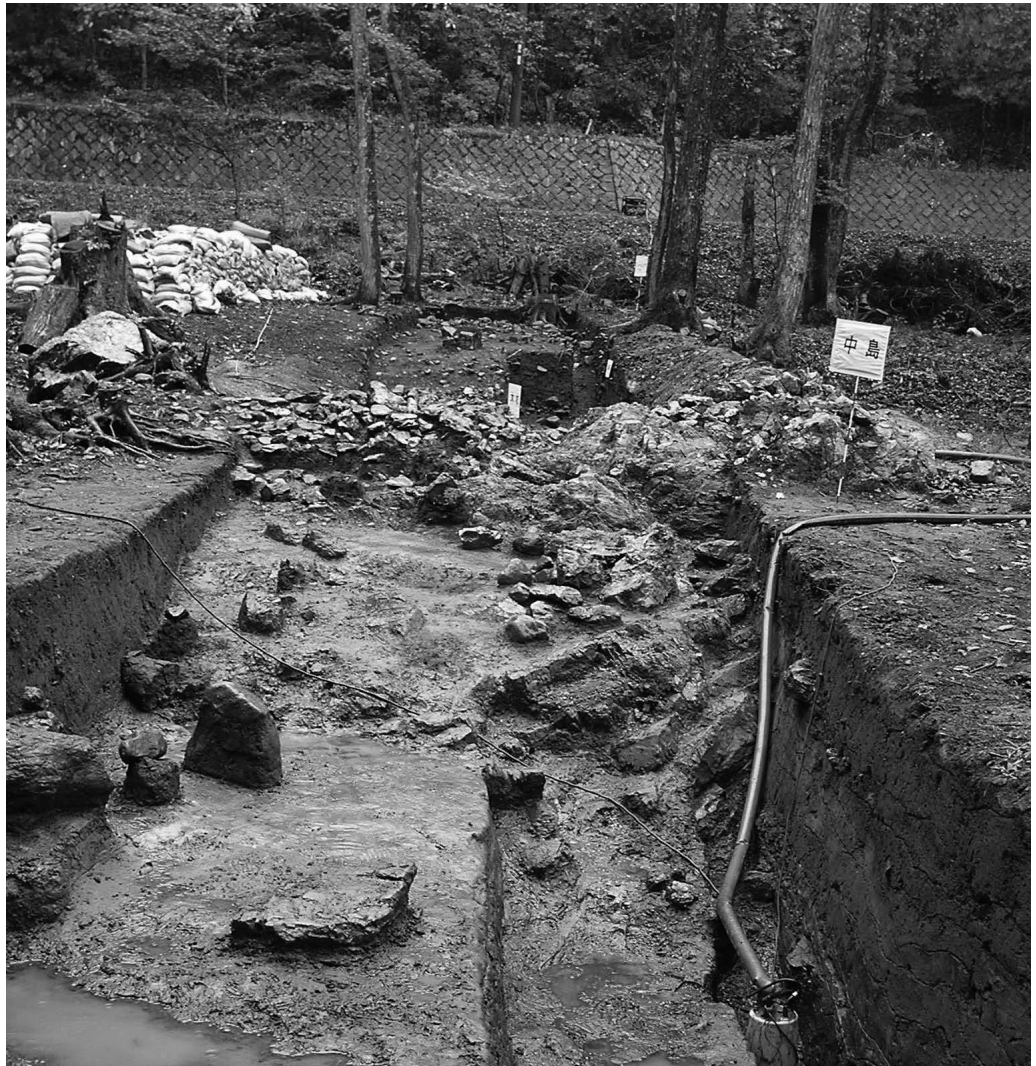


滋賀県高島市朽木池の沢遺跡
二時期にわたる園池を検出



池の沢遺跡は、安曇川によって形成された朽木谷左岸の河岸段丘上に位置する。遺跡のある北側は棚林谷で、東・南側は安曇川をのぞむ断崖である。西側には市道が通じ、その背後は急な傾斜面となっている。

平成18年度の調査では、園池の構築及び改修、堆積状況が確認され、地山を掘り込んで構築した園池(I期)と、それを埋めた後、盛り土によって新しく形成された園池(II期)が検出。II期は、I期の園池を改修して構築したとみられ、現地形でも確認することができる。

II期の園池からは中島が検出され、東西約6m・高さ

約1.5mの岩盤上に川原石・角石を積み上げ構築されており、それらの流失を防ぐための木杭が打ち込まれている。また、中島の東西の池中には直線的に並んだ木杭が検出されており、橋脚の跡ではないかと考えられている。

園池が造られた時期や改修時期を明らかにする遺物は出土していない。しかし、過去の調査から、II期の園池は鎌倉時代前期(13世紀前半)には造られていると判断されることから、その下層に位置するI期の園池は、それよりも古い時代のものであると考えられる。

「池の沢遺跡発掘調査-現地説明会資料-」引用

平成18年度 関西大会 プログラム 決定

前号で予告したように、関西大会が平成18年12月9日と10日の2日間、京都御苑と栗田口周辺を舞台に行われることとなった。9日の現地見学会では、京都御苑内に遺る公家の庭園跡を巡り、現在整備に係わる発掘調査が進められている知恩院方丈庭園等の見学を行う。見学会の後には、夜の京の街で懇親会が催される。

10日の公開シンポジウムでは、庭園学を含む4種の学術分野からそれぞれの視点で庭についての話題提供を行い、それをもとに庭の研究の可能性についてパネルディスカッションを行う。同日午後からは、最新の遺跡庭園についての特別発表の後、研究発表会が行われる。こぞってご参加頂きたい。

日 程 平成18年12月9・10日(土・日) 会 場 京都市内(京都御苑・栗田口周辺)

参加費 1,000円(見学会料含む:会員外は1,500円) 資料代 1,000円(2日間共通)

定 員 60人

申し込み方法 住所、氏名、懇親会への参加の有無を記載の上、12月2日必着で、FAXもしくは郵送で下記まで。なお、関西大会に関する問い合わせは、FAXのみでお願いします。

申し込み先 〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116 京都造形芸術大学 日本庭園研究センター内
日本庭園学会関西支部事務局

12/9 見学会 京都御苑から栗田口へ



近衛邸跡の庭

見学会では、まず京都御苑内に遺る宮家の庭園跡として、近衛邸跡、九条家邸跡、閑院宮邸跡を巡る。閑院宮跡では環境省より講義室をお借りし、実際の発掘調査と整備に携わった担当者からその概要と実態の説明を頂く。次に会場を京都御苑から栗田口へと移し、青蓮院の庭と知恩院方丈庭園を見学する。知恩院方丈庭園では、昨年実施された発掘調査の成果と、今後予定されている整備及びそれに係わる発掘調査について、担当者から解説を頂く。京都の庭園文化の濃密さを体感して頂きたい。

- 13:00 集合 京都御苑今出川御門前
(地下鉄烏丸線今出川駅下車徒歩4分)
- 13:05 近衛邸跡の庭
- 13:45 九条邸跡の庭
- 14:00 閑院宮邸跡庭園
～ 特別発表 閑院宮邸跡庭園の発掘調査
- 15:00 鈴木久雄(京都市埋蔵文化財研究所)
閑院宮邸跡庭園の整備の実態
吉村龍二((株)環境事業計画研究所)
- 15:20 青蓮院の庭
- 16:00 知恩院方丈庭園(京都市指定名勝)
- 16:45 解 散



九条邸跡の庭

12/10 公開シンポジウム 「日本庭園を巡る最前線 2006」

今回の公開シンポジウムは、日本庭園に関わる研究について諸学会との連絡提携を深めるべく、考古学・民俗学・歴史地理学・庭園学のそれぞれ視点から情報提供を頂き、パネルディスカッションを行う。少しは庭に興味を持っているが、なにか取っつきにくい、また庭園学に携わっているなかで諸学問との連携を探っているという方にもぜひご参加を頂きたい。

会場 レジーナ京都（今出川新町通下ル東側）

9:30 開会

I 部 話題提供

9:35-10:00 「海外の日本庭園の現況と修復について」

福原成雄（大阪芸術大学 教授）

要旨 海外の日本庭園の実態調査を日本造園学会で行なった。その数と現況を明かにすると共に、現状の内容について調査を行なった。中には、維持管理の方法が分からなく、見よう見まねで修復されているものもあった。英国タトパーク日本庭園修復を通して海外での修復方法と、その後の維持管理の方法について紹介を行なう。

10:00-10:25 「カナダ西岸における日本庭園の萌芽—日本人移民とガーディナー—」

河原典史（立命館大学文学部 助教授）

要旨 1907年7月、岸田芳次郎と高田隼人はビクトリアに George Park を建設した。実際に造園を担った岸田の実父・Isaburo は、やがて Butchart Gardens に Japanese Garden の作庭を任された。これらの影響を受けつつ、後の社会主義者でバンクーバーに渡っていた山本宣治は、翌年に日本庭園会社の事務主任に就き、本格的な日本庭園の設計に奮闘する。しかし、当時の日本人排斥運動はその計画を中断に追い込んだ。

10:25-10:50 「民家の屋敷地とニワ—その民俗的素描—」

村上忠喜（京都市文化財保護課）

要旨 これまで、庭園学・庭園史と民俗学が、学的交流をほとんど持たなかったのは不思議な気がする一方で、ある意味当然かと思う気持ちもある。というのも、民俗学からみれば、庭園というと一部上層階級の特異な文化として完結しているような印象を抱くからである。しかし、「庭付き一戸建住宅」が高度経済成長期の庶民の夢であったように、今や庭は必ずしも一部特異な文化としてのみ捉えるのは片手落ちであろう。そこで本報告では、これまでの民俗学の知見から、かつての民俗社会

にみられたニワの多様性にかかわる素材を紹介し、今後、庭園学・庭園史とどのような議論を交わすことができるのかについて考えてみたい。

10:50-11:15 「置塩城の遺跡庭園」

山上雅弘（兵庫県教育委員会）

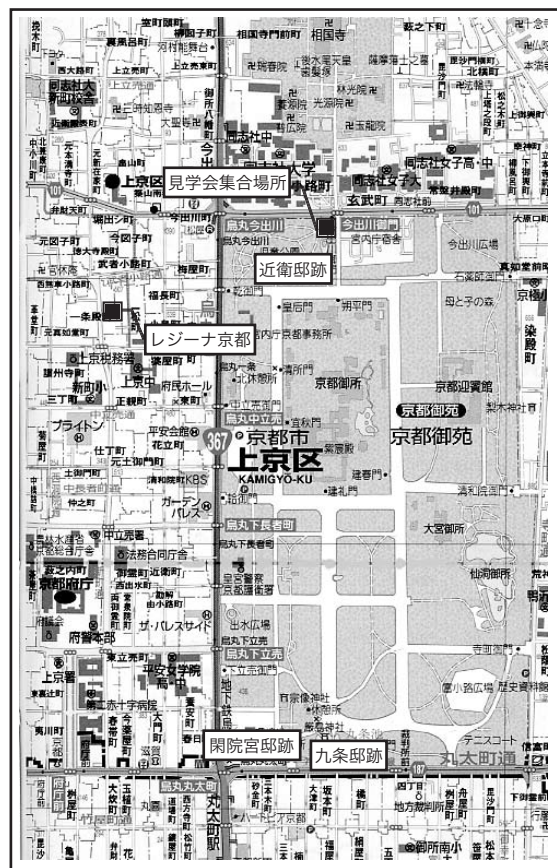
要旨 播磨守護赤松氏の本城、置塩城の国指定に伴う発掘調査によって、主郭周辺の曲輪内に戦国末期の庭園遺構が見つかった。山城である本城の庭園遺構と、守護居城の特異性について検討する。

II 部 パネルディスカッション

11:20 「日本庭園と庭の研究の可能性」

進行 今江 秀史（京都市文化財保護課）

12:00 終了



12/10 特別発表・研究発表会 **まさにここにある庭園文化の多様性**

昨今、全国各地で遺跡庭園が検出されており、年ごとに庭園文化の歴史的な広がりを目の当たりにすることができている。特別発表では去る11月11日に現地説明会が行われたばかりの池の沢遺跡（滋賀県高島市朽木村井）の庭園遺構についての報告が行われる。研究発表会では、遺跡庭園や中国庭園などについて6件の研究発表が行われる。

会場 レジーナ京都（今出川新町通下ル東側）

12:30 受付開始 13:00 開始

13:00-13:45 特別発表「沢の池遺跡の庭園遺構」
宮崎雅充（滋賀県高島市教育委員会）

13:45-14:10 「善生寺庭園（伝雪舟庭）について
（中間報告）」
多々良 美春

概要：本庭園は『防長風土注進案』に「後庭の泉水は西方寺の時の餘波にして雪舟是を疊めりとそ」と記されていることから雪舟作と伝えられている。

昨年度の発掘調査では、旧池跡の池底であったところから室町期の土師器が検出された。このことにより、旧池が室町期以前から存在していたことがほぼ確実となり、これは庭園の成立時期を考える上で有力な情報である。また新たに、大内氏が山城を構えていた鴻ノ峰を借景とする可能性も見いだされた。

14:10-14:35 「中国における庭園植栽の特色」
河原 武敏

概要：中国における庭園植栽は築山・水景・庭園建築と共に庭園を構成する四大施設の一つとして扱われている。本文は中国の風土や文化のもとで、どのような植栽特質が見出されるかについて、植栽の沿革を概説し、その技法を庭園内建築の周辺、山水景の周辺、園路の周辺その他を対象にして考察し、それによって見出された植栽原則を明らかにするものである。

14:35-14:50 「平安京域及びその周辺における庭の遺跡分布」
今江 秀史（京都市文化財保護課）

概要：京都市内では、特に平安京域及びその周辺で数多く庭の遺跡が検出されている。発掘調査は、小規模で行われることが多く、全面的な発掘調査は稀であり、全体

像を把握することが難しいとされている。近年、発掘調査成果の蓄積により、庭の遺跡の分布及び実態像、変遷が明確になりつつある。本報告では、平安京内及びその周辺における庭の発掘調査の成果をまとめ、紹介する。

14:50-15:00 休憩

15:00-15:25 「日本庭園に於ける三尊石組の黄金比に関する研究」

堀澤 真澄（舞鶴市文化財保護委員）

概要：上原敬二等により庭園に於いて黄金比は融通の利かない歴史上の考え方であると批判されてきたが、演者はスイス製の黄金分割デバイダー「コンパッソ・レオナルド」を使用し、三尊石組の写真を対象として、江戸末期までの45以上の石組についてユークリッドの線分割即ち「外中比」を測定したので報告する。

15:25-15:50 「閑院宮邸跡庭園修復事業」

吉村 龍二（(株)環境事業計画研究所）

概要：発掘調査所見を取り入れ、統一的造園技法にて復元された京都御苑内にある旧閑院宮邸跡庭園修復事業について、設計及び設計監理の立場から報告を行う。

15:15-16:15 「夢窓疎石に関わる庭園の空間構成に関する一考察 - 瑞泉寺庭園と西芳寺庭園を事例として -」

河原 由紀、宮内 泰之（恵泉女学園大学）

概要：夢窓疎石の関与が指摘されている鎌倉の瑞泉寺庭園と京都の西芳寺庭園は、いずれも所在地一帯の地形・風土を巧みにいかした空間構成となっている。本研究では両庭園に共通してみられる上下二段の空間構成に着目し、禅宗寺院庭園における眺望や植栽等の意義を比較検討した。瑞泉寺庭園から西芳寺庭園に至る過程で、庭園景観および眺望の担う役割が視覚的なものからより精神性に依存する構成へと変容する状況が示唆された。

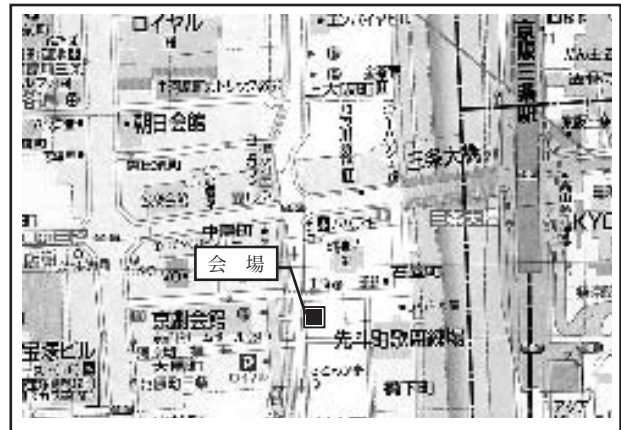
16:15-16:20 総評

16:20 閉会

12/9 懇親会 明日の庭園学を語ろう

見学会で寒くなった身体は、ぜひ懇親会で暖めて頂きたい。会場は、京都随一の繁華街、三条河原町近辺。

会場 のんべえかまど 木屋町店
(木屋町河原町通下ル東側、075-241-0002)
会費 4,500 円 (学割あり)
18:00 開始 20:00 終了 (予定)



平成 18、19 年度委員会について

去る 7 月 22 日、臨時理事会が開催され、平成 18・19 年度の委員会人事配置の構成が決定した。

■委員会

総務委員会

委員長 佐々木 邦博
委員 三島 孔明・宮内 泰之

大会実行委員会

委員長 鈴木 誠
委員 井上 元・谷川 章雄・玉井 哲雄・古谷 勝則

関西大会実行委員会

委員長 鈴木 久男
委員 栗野 隆・菅沼 裕・仲 隆裕・中根 史郎・前田 義明

見学会実行委員会

委員長 澤田 天瑞
委員 加藤 元信・野村 勘治

研究会・シンポジウム実行委員会

委員長 小野 健吉
委員 栗野 隆・市川 秀和・杉本 宏

広報委員会

委員長 仲 隆裕
委員 今江 秀史・吹田 直子

学会誌刊行委員会

委員長 藤井 英二郎
委員 大澤 伸啓・足立 佳代
論文審査 浅野 二郎
牛川 喜幸
河原 武敏
中村 昌生

10 周年記念事業委員会

委員長 浅野 二郎
委副委員長 中島 宏・河原武敏

10 周年記念事業事典編纂実行委員会

委員長 浅野 二郎
副委員長 牛川喜幸
委員 中村昌生・岩田勝之助・前田宗正・中村静夫・鈴木久男・藤井英二郎・中島 宏・河原武敏

10 周年記念事業事典編纂実行委員会

委員長 浅野 二郎
副委員長 牛川喜幸・中島 宏
委員 井上 元・今江秀史・大澤伸啓・小口健蔵・小口基實・小野健吉・金 眞成・佐々木邦博・高瀬要一・田川国男・高橋一輔・多々良美春・戸田芳樹・仲 隆裕・中根史郎・藤井英二郎・前田義明・宮内泰之

学会賞選考委員会

委員長 浅野 二郎
委員 河原 武敏・今江秀史・佐々木邦博・鈴木 誠

足利の文化財一斉公開



巖華園、物外軒庭園公開される

栃木県足利市では、足利の文化財一斉公開事業実行委員会が中心となり、今年度よりはじめて秋の文化財一斉公開を実施する。国・県・市の指定文化財を中心として市内全域の社寺や文化財公開施設の協力を得て実施するものだが、11月23日(水)から11月26日(日)までの4日間、市内40ヶ所で一斉に文化財の特別公開を行うものである。

庭園では、巖華園及び物外軒庭園の公開が注目される。巖華園は、春の研究大会でも発表された江戸時代後期に

造られた庭園であるが、足利市の北郊外に位置する。岩を豊富に使った意匠は、中国清代の文化の影響を受けたものと推定され、当時の当主が渡辺華山や椿椿山ら一流の文人と交流があったことともあわせて、江戸時代後期の文人が中国画に見る風景への憧れをこめて作庭した庭園と考えられる。中国画を模倣した江戸時代後期の文人画を見るような岩組みが各所に展開している。

物外軒庭園は、明治時代に足利市街地の旧家・柳田家の庭園として作庭されたもので、一角には明治時代初期に造られ、明治38年にこの地へ移築された茶室・物外軒(足利市指定文化財)があり、その周囲の露地と北側の池泉からなる。本年3月に文化財庭園保存技術者協議会の現地研修地となり、今まで蔦に隠れていた池周囲の護岸や滝を構成する石組が見事に姿を現した。また、樹木の剪定もなされ、面目を新たにした。

深まり行く秋のこの時期、足利は、ちょうど紅葉が盛んな時期である。両庭園ともに多くのモミジがあり、見事な紅葉が期待される。公開時間は、巖華園が午前10時から午後3時、物外軒が午前9時から午後4時まで、見学は無料である。11月の後半は、特別公開される多くの文化財と紅葉を見に、足利まで是非とも足をはこんでいただきたい。(大澤伸啓)

▼問い合わせ先 足利市教育委員会文化課

TEL0284(20)2230

足利市のホームページからも見ることができる。

速報

奈良文化財研究所古代庭園研究会開かれる

去る平成18年10月25日(水)に奈良文化財研究所において平安時代庭園に関する研究集会在開催された。この研究集会是平成13年度から続いているもので、これまでに古墳時代以前、飛鳥時代、奈良時代、曲水宴に関する研究を行ってきており、今年度からは5カ年計画で平安時代庭園に関する研究に取り組む予定である。

今回はその第1回目にあたる。5カ年計画(平成18～22年度)では、これまで文献主体であった平安時代庭園に関する研究を発掘庭園遺構と総合して考える場にしたというのが趣旨である。

第1回の研究集会是平安時代庭園に関する研究の現状・情報を把握することが主たる目的で右記の報告と討議を行った。(高瀬要一)

報告

平安時代庭園研究の現状 高瀬要一

(奈良文化財研究所)

平安時代庭園発掘調査の概要 内田和伸 (同上)

史料から見た平安京の庭園 京楽真帆子

(滋賀県立大学)

絵巻から見た平安京の庭園 仲隆裕

(京都造形芸術大学)

平安時代庭園の植栽 飛田範夫 (長岡造形大学)

討議

※本研究会について、奈良文化財研究所に問い合わせ及び資料請求をするのはご遠慮下さい。(広報委員会)

寄稿 第1回 けいはんな記念公園 庭園講座 開催される



酬恩庵（一休寺）

けいはんな記念公園（京都府精華町）では、京都の庭園文化を地域の方々に親しんでもらうことを目的として、『庭園講座』を開催している。

具体的には、庭を構成する樹木から日本庭園の有り様まで幅広い知識を持っていただくことを目的に、「学術編」と「技術編」からなる全4講座を企画している。「学術編」では実用的でかつ専門知識も習得できるような内容を、「技術編」では自宅の庭でできる剪定や生垣づくり等を、どちらも専門家を講師として迎え開講する。

第1回は、平成18年10月28日（土）に「一休寺にて庭を見、庭を知る」をテーマに開催した。講師に今江秀史氏（京都市文化財保護課）と加藤友規氏（植彌加藤

造園（株））を招き、午前中は当公園にて講義、午後からは午前の講義内容を念頭に、講師と共に京都府京田辺市にある酬恩庵（一休寺）を巡った。庭の手入れに関心のある参加者が多く、歴史的背景を踏まえつつも自宅の庭で応用できる講座内容は大変な好評を得た。庭の手入れに関して、庭師に全てまかせるのではなく、知っておくとい「住まい手がイメージする庭を的確に表現する言葉」など、メモを取りながら真剣に耳を傾けていた。結果として、第1回目の参加者全員から第2回庭園講座への参加申し込みがあった。

第2回は「技術編」で、11月23日（木・祝）に開催し、庭木の剪定講習を行う。「プロでしかできない剪定とアマチュアでもできる剪定」をテーマに、住まい手ができる庭づくりを勉強する。また、年明けに第3回「技術編」として、竹垣づくりを予定。竹垣のほかに自宅の庭の写真等を題材に専門家からのアドバイスを受けることができるような機会もつくる。いずれも定員25名（先着順）、第二回の参加費は800円、第三回は参加費未定。

寄稿：岩本英美代（けいはんな記念公園）

▼問い合わせ先

（関西文化学術研究都市記念公園）

TEL:0774-93-1200（担当：鳥居・岩本）

京の秋 寺院夜間特別拝観

京都及び長岡京市内では、各地で夜の夜間特別拝観が行われている。下記の事業は、京都文化交流コンベンションビューロー（tel:075-212-4110）が文化事業の一環として支援をしている。

高台寺・高台寺塔頭 圓得院（京都市東山区）

日時 10/20～12/3 17:00～21:30分（受付終了）

交通 京都市バス東山安井駅下車

永観堂禅林寺（京都市左京区）

交通 京都市バス南禅寺・永観堂駅下車

日時 11/8～11/30 17:00～21:00時（受付終了）

天龍寺塔頭 宝厳院（京都市右京区）

日時 11/10～12/3 18:00～20:30（受付終了）

交通 京都市バス嵐山天龍寺前駅、京福電車嵐山駅下車

東福寺塔頭 天得院（京都市伏見区）

日時 11/17～12/2 17時～20:30（受付終了）

交通 京都市バス東福寺駅、JR・京阪電車東福寺駅下車

光明寺（長岡京市）

日時 11/17～12/2 17時～20:30（受付終了）

交通 阪急バス光明寺駅下車

集中連載 「庭園探訪」 第1回 竹村家住宅の庭園 (高知県佐川町)

連載の趣旨

独立行政法人文化財研究所・奈良文化財研究所では、全国各地の歴史的建造物について、その文化財的価値を明確にするための調査を継続的にこなっています。筆者は、奈良文化財研究所建造物班のスタッフとして建造物に付属する庭園の調査を担当しています。

これまで、いくつかの調査であつかった物件は、歴史的には誰にも注目されることがなかったものですが、実にみごとな庭園ばかりでした。そこで、この学会ニュースという場を拝借して、筆者が調査をおこなった庭園をこれから継続的に紹介していこうと思います。(粟野 隆)

高知県佐川は、ランドスケープ史を専門とする筆者にとっては、きわめて興味深い地域だ。日頃わたしたちがお世話になっている『牧野植物図鑑』を著した世界的な植物学者・牧野富太郎や、東京は目白台に「芭蕉庵」を造営した宮内大臣・田中光顕を輩出した土地であるのももちろんのこと、「高知三名園」と名高い青源寺、乗台寺の二庭園を擁する地域でもあるからだ。

小稿では、このような質の高い庭園文化を有する佐川において造営された竹村家住宅の庭園(江戸時代末期)を紹介しよう。本住宅は、その主屋を江戸末期にすでに総二階として建築し、室内意匠も土佐和紙をふんだんに取り入れた貼付壁で仕上げているという点で、建築的にもすばらしい。端的に言えば、坂本竜馬の愛した土佐の地酒「司牡丹」蔵元のご当主の本宅だ。

街道をすすむと、下見板張りの腰壁に、壁を白漆喰で仕上げた塀で区画された大きな住宅がみえる。竹村家の建築群だ。静寂のなかに凄まじい迫力をもつ。切妻棧瓦葺の棟門形式の表門をくぐると、主屋開口を格式高くしつらえた式台に取付く前庭がある。景物は、蹲踞のごとく据えられた配石組、主屋西棟に連絡する飛石、五重石塔だけで、庭面は淡黄色のさび砂利を一面に敷いている。さて、恐縮しながら式台で沓を脱ぎ、玄関から次ノ間(6畳)、上ノ間(8畳)に歩を進めると、主屋の上ノ間および茶室に面して、付属屋と土蔵で囲繞された主庭にたつする。形式的には、主庭北西隅の地瘤に据えられた滝組を中心とした枯庭であり、主屋および付属屋の各室からの屋外動線を結び付けるべく、庭内は飛石を縦横に打つ。茶室には自然石をくり抜いた手水を持つ向鉢形式の蹲踞、上ノ間および付属屋の化粧室には鉢前を設置する。

主庭の骨格をつくる枯滝組は、三尊石組を基調とした配石構成を採る。上ノ間の縁を視点場として、主石とな

る中尊石の根入れからの石高は胸高程度、脇侍石は腰高程度で、近世末期の滝組の標準スケールを示す。派手さはないが、技巧的にしつらえられた上品な石組だ。また、庭内の飛石園路は自然石を基調としつつ、短冊形や円弧状の切石も使用して、さながら「行の平庭」としての近世庭園の特徴を具備したものだといえよう。

ところで、本庭園の特徴を決定付けるのは、前庭と主庭がそれぞれ主屋前後に取り付き、次ノ間と上ノ間を挟み込むような形で配置されたことにより創出された通景線だ。次ノ間と上ノ間の縁間距離はわずか32尺程度だが、両側に庭園空間が配置されることにより、実距離以上の奥行きが表出されている。本庭園については、建物と庭園が渾然一体となって織り成す空間の「奥性」が、この住宅の価値を支えるもっとも重要な要素だと指摘することができ、細部の技巧もさることながら、建築と庭の関係にも注目すべきだろう。

なお、竹村家住宅の向側には、司牡丹酒造の酒蔵がある。この地を訪れる際には、少しお酒で心地よくされ、一帯の景趣のある町並みを味わっていただきたい。



竹村家住宅の庭園

図書紹介

『竹・笹のある庭 鑑賞と植栽』



柴田昌三著

創森社、2006.4
(3,800円＋税)

本書を読んでいて、ふと気づいたことがある。それは世の中に樹木の種類やその育て方、デザインの書物は多かれど、植栽という植えられた樹木について書かれたものがいかに少ないかということである。またタケ・ササについて書かれた書物自体が少ないのだから、本書はその植栽について記されているという点で、希有の存在といえる。

本書には随所に著者のタケ・ササに対する愛情が込められており、それが読者への親切というかたちで現れているように思える。ページをめくれば、実に様々な場所や環境に植えられたタケ・ササが写真付きで紹介されている。JR 東京駅丸の内口に植えられたオカメザサなどは、何度も目にしているはずなのだが、ほとんど記憶になくはっとさせられた。

おそらく普段何気なく歩いている限りでは、タケ・ササの存在は風景に馴染んでしまっているであろう。しかし、本書を通すと、その利用や手入れ方法の違い、地域ごとの特色を鮮やかに想起することができる。桂離宮の桂垣や小石川後楽園のオカメザサが、東京の近代ビルの植栽と同様に扱われているのにはやや違和感を感じるが、時代によるタケ・ササの利用形態の違いや、今なお広がる可能性には驚かされる。

タケ・ササの植種説明では、まず植栽されている風景が一通り紹介された後に、個々の詳細が解説されていることから、実体験に近い感覚で学ぶことができる。巻末にある栽培と利用の節は、庭いじりを趣味とする個人から、庭園管理技術者、造園設計者まで活用ができる内容となっている。また海外におけるタケ・ササの植栽事例は、珍しいものが多く、造園設計者には大いに刺激になるであろう。

ところで、著者は『現代日本植物誌9 ネコとタケ 手なずけた自然にひそむ野生』（岩波書店、2006）という書物で、竹藪の拡大の問題を端緒にタケ・ササについてより一般的な解説をしている。なお、この猫とタケの共通点は「のびのびした野生の美しさである」そうだ。タケ・ササの専門家が異なる視点で記した両著を併せて読めば、なおいっそうタケ・ササへの理解が深まるに違いない。写真集としても手に取れる親しみやすさもあり、造園設計者には必携の図書である。

(今江 秀史)

「庭園学講座 近江の庭園と文化的景観」開催される

平成 18 年 9 月 1 日から 3 日にかけて、京都造形芸術大学日本庭園研究センターは、毎夏恒例となっている公開講座「庭園学講座」を開催した。本年度は近江八幡市、彦根市、長浜市と毎日会場を移動し、「総論 近江の庭園と風景」（尼崎博正氏）、「名勝と文化的景観 - 文化的資産としての風景の保護制度 -」（平澤毅氏）、「世界遺産と文化的景観」（安原啓示氏）、「近江のまちと文化」（河内美代子氏）などの講義が行われ、近江八幡市では昨年、重要文化的景観第 1 号となった水郷と旧西川家庭園を、彦根市では名勝玄宮楽々園と名勝旧彦根藩下屋敷（御浜御殿）庭園を、長浜市では名勝慶雲館庭園と布施宇吉の庭園などの見学および解説が行われた。

滋賀県には、京都府について文化財庭園が多く存在する。これらの特徴を、まちの歴史文化とあわせて考究した講義は学術的にも質が高く、「自然美はだれもが感じることができるものであり、まさに味わうべきもの」と論じた中村一氏の

「自然美と名勝」の講義はまさに圧巻であった。また見学は実際に庭園の管理や整備に携わった技術者の解説が行われるなど実践的な内容であった。特にこの数年間に重点的に植栽整備が行われた名勝玄宮楽々園はかつての荒廃した様相が一変し、力強くも優美な本園の魅力を十分に味わうことができた。また夜間に行われた「虫の音を聞く会」は、近年各地で行われている派手なライトアップではなく、行灯を主体とした控えめな照明であり、風流を感じさせるものであった。

本講座は公開講座で、毎年異なるテーマで開催され、誰もが参加できる。学生、公務員、造園技術者、教員など多くの庭園ファン・専門家が熱弁をふるいあう情報交換会が設定されていることも本講座の魅力である。来年は京都の町家の庭をテーマとして開催されるという。今後も質の高い講座が開催されることを希望したい。

学 び の 庭

第2回 歴史地理学

話題提供者

河原典史 (かわはらのりふみ)

プロフィール

1963年 大阪府生まれ

経 歴

1987年 立命館大学文学部地理学専攻卒業

1993年 立命館大学大学院文学研究科地理学専攻博士後期課程単位取得退学

1995年 立命館大学文学部助手、講師を経て

1998年 立命館大学文学部助教授、現在に至る

2001年 ブリティッシュコロンビア大学日本研究所
客員研究員(1年間)

専 門

歴史地理学(日本・カナダ・朝鮮・台湾をめぐる日本人漁業者の移動)／日系移民史

論 文

「第二次世界大戦以前のカナダ西岸における日系造船業の展開 - 和歌山県出身の船大工のライフヒストリーから -」、立命館言語文化研究 17-1、2005。

「カナダ・バンクーバーにおける日系ガーディナーの先駆者 - 高知県宇佐出身の山本省之助・半次兄弟 -」、土佐地域文化 10、2006。

「植民地期の朝鮮における缶詰製造業をめぐる歴史地理学的研究」、三島海雲記念財団研究報告書 43、2006。

編集部(以下、編) このたび「カナダ西岸の日本庭園の萌芽」と題して、公開シンポジウムの話題提供を頂くことになっていますが、そもそも、このような研究をされるに至った経緯を教えてください。

河原氏(以下、河原) まずは、カナダのバンクーバーにあるブリティッシュコロンビア大学(UBC)へ、2001年にカナダ日本人漁民の研究に行ったことがきっかけです。一年間の滞在中に、ある程度、日本人漁民のデータを得ることはできたのですが、その過程で日本人移民の職業の一世が漁業、二世がガーディナー、三世がホワイトカラーと推移していることが当然のように書かれており、それらの世代ごとに主

体となる人々の出身地が限定していることに関心を持つようになりました。

バンクーバーには日本ガーディナーズ協会(以下、協会)があり、カナダに滞在中にその会員である田並氏にお世話になりました。田並氏は協会の重鎮で、かつブリティッシュコロンビア州和歌山県人会の元会長で、この方に色々とガーディナーのことをお聞きし、今も現役で造園業を営んでいる大草氏を紹介してもらいました。60周年を迎える協会の歴史を調べていた大草氏には、これまで千葉大学をはじめ、農学・園芸学などの研究者が来ることはあったが、なぜ歴史地理学の人か来ると不思議がりましたが、いろいろなことを教えてもらいました。

日系ガーディナーズ協会では月に一度、勉強会を催し技術の研鑽をしておられます。私が日本に帰国する時期が近づいた頃、大草氏からカナダの日系ガーディナーの軌跡の講義をしてほしいかと頼まれました。それで急遽まとめた資料が、今回の話題の元になっています。

編 カナダ移民のうちに、なぜガーディナーになる人が生まれたのでしょうか。

河原 カナダに観光へ行くほとんど日本人が訪れるところに、ビクトリアのブッチャートガーデンがあります。資料によると、その中にある日本庭園はキシダ イサブロウ(Isaburo Kishida)という人が造ったものです。しかし、日本人観光客は、その経緯を知らないと思います。カナダの日本人ガーディナーの系譜を概観すると、大まかに4期に分けることができます。1900年代初期の第1期の中心人物は、キシダ イサブロウを呼び寄せた息子の岸田芳次郎と高田隼人です。そして、後の社会主義者・山本宣治も忘れてはなりません。これらの人々は、カナダに日本庭園を築くことを明確に意図しており、岸田と高田はビクトリアにゴージパークを造りましたが、バンクーバーでの山本の取り組みは続かず、事実上失敗したといえるでしょう。

もともと、早い時期のカナダ移民である和歌山県人や滋賀県人は、漁業や商業、製材業を生業としていましたが、その後続く高知県人や鳥取県人らは、それらの生業にあまり就くことがありませんでした。さらに、1920年代後半からは世界恐慌のあおりも受け、日本からの移民はなかなか就職できませんでした。そこで、英語がうまくできなくても、黙々と作業をこなすことができる芝刈りを生業とするようになったようです。こうした芝刈りというかたちで庭に携わるようになったのが第2期の人々といえます。

編 後発の移民は、就く仕事が多かったため庭仕事に落ち着

いたということでしょうか。

河原 実際、彼らはガーディナーといっても芝刈りだけで、庭を造るというレベルではありませんでした。よくいわれることですが、日本人は器用かつ仕事がいねいで、さらに顧客の夫人がピンク色を好むことを知っていれば、さりげなくピンクの花を植えるといった気配りもできたことが、庭仕事に向かわせたようです。なお、高知県人は大工も多く、ガーディナーとして庭仕事を主体としていたのは鳥取県人です。また鳥取県人といっても西部の伯耆出身の人が大部分で、因幡出身はほとんどいませんでした。

編 和歌山県、高知県、鳥取県といったように限定された地域の人が、カナダに移住しているのはなぜですか？

河原 それは日本移民学会でも議論になっていますが、現時点で明確な理論はありません。推測するところでは、景気から誘発されるものと考えられます。日本でそれぞれの生業が不景気だった地域から、外国の好景気の地域に流れるようです。それゆえに移民してからの生業は、母国での生業を踏襲することが多いのですが、戦前の芝を刈る程度のガーディナーについては、必ずしも日本での生業とは結びつきません。

編 ところで、移民は第二次世界大戦を経験することになりますが、その影響はどのようなものだったのでしょうか。

河原 カナダの日本人ガーディナーの第3・4期に位置づけられるのが、戦後の1940年代です。まずは第3期ですが、真珠湾攻撃を契機にカナダ移民は、日本に送還されるかカナダ内陸部に強制移動させられるかの選択に迫られます。当然、移民のなかには日本へ帰る人とそうでない人が発生します。そのうちカナダに残った人々は働こうと思っても、製材や伐採、とくに権利を奪われた漁業には就けませんでした。そのようななか、戦前から芝刈を生業としていた鳥取県出身者を中心とするガーディナーが、日本人の就く職業として注目されたのです。

戦後、敵国であった日本人の移民を受け入れる際、まず入国を許されたのが、もともとのカナダ移民や、カナダで生まれた帰加2世と呼ばれる人々でした。したがって、その絶対数は最も早くからカナダ移民を輩出していた和歌山県人が多くなったのです。そして、1世が漁業に就いていたものの、2世・帰加2世の就いた職業は、比較的簡単に技術修得ができた芝狩り、ガーディナーだったのです。

編 それで、カナダに残った鳥取県民はどうなったのですか。

河原 鳥取県出身者は、既に顧客を抱えていたため戻ってきた移民が芝刈りを始める際にやりかたを教えるなど、親方的存在になっていきました。そのような経緯から日本ガーディ

ナーズ協会の重鎮には、鳥取県出身者が数多くおられます。**編** では、現在につながる第4期はどのような人々なのでしょう。

河原 第4期は、1960年代からで、この時期、カナダ国籍をもっていない日本人の新しい移住が再び許されることとなります。その新しい移民の多くは沖縄県人や北海道人です。彼らの移住により、庭仕事を主導するのが重鎮になっていた鳥取県出身者、中堅に和歌山県出身者という構図ができていきました。しかし、芝刈りだけではない日本からの造園技術を導入したのはこの新移民です。事実、冒頭にも紹介しました大草氏も、この時期の新移民にあたります。

編 現在も庭仕事は日本人が中心になっているのですか？

河原 今もお沖縄県や北海道出身者を中心とする日本人は現役ですが、そろそろ壮年の世代です。今日では、わざわざ日本からガーディナーとして移住してくる人も稀で、芝刈りはベトナムやインドから来た人びとが行っているようです。

編 移民の庭園文化は、引き継がれていくのでしょうか？

河原 協会の重鎮達は、新しく日系人が庭仕事に携わらなくなっていることを懸念しているようです。だからこそ、私が帰国前にカナダの日本人ガーディナーの軌跡の講義したことに、とても感銘を受けてくれたのではないかと思います。

編 最後に、これはこの企画で対談する方に必ず聞くようにしているのですが、先生にとっての庭園に対する率直な印象とはどのようなものですか。

河原 実のところ私には造園業を営んでいる親戚がいて、学生の頃、そこでアルバイトをしていたことがあります。それまで庭仕事といえば、庭木に水やりをすることとっていました。アルバイトでは、ちょうど大阪で開催された花博のための花壇を造る手伝いをしていましたが、想像と違って、ウンボ(バックホウ)が唸りをあげる建設現場のような光景で、驚かされた覚えがあります。また、母親は漁村生まれで、かつて生家は鮮魚仲買業を営んでいました。

そのような記憶もあって、サケ漁業に携わっていた親をもつ和歌山県出身の2世が、ガーディナーをしていることがとても不思議に思えたのです。それを検証しようとしたのが、今回の研究の動機になったといえます。

編 それは何か運命的なものを感じますね。

河原 今思えば、私が庭園に関連する研究をしているのは、必然だったのかもしれませんが(笑)

編 長時間、本当にありがとうございました。

(平成18年11月13日) インタビュアー：今江 秀史

新会員会員の紹介

今回、新しく加入した会員は以下の通り。

氏名：加藤友規(カトウ トモキ)

出身：京都府京都市

経歴：平成2年、千葉大学園芸学部園芸経済学科園芸経営技術学研究室を卒業。卒業後、植彌加藤造園株式会社に勤務。現在、同社代表取締役社長。

業務経歴：身近な日本庭園の管理現場は、南禅寺方丈庭園・南禅院庭園・東本願寺涉成園など。

コメント：庭園・公園・土木・建築・森林など、造園業の多様な業務分野に携わるなかで、ライフワークとしての大好きなテーマは、やはり文化財庭園の維持管理・修復である。

氏名：吉村龍二(ヨシムラ リュウジ)

出身：京都府京都市

経歴：平成2年、京都芸術短期大学造形学科卒業。卒業後、株式会社環境事業計画研究所入社。平成12年京都造形芸術大学日本庭園研究センター客員研究員。平成14年株式会社環境事業計画研究所所長就任。同年選定保存技術文化財庭園保存技術者協議会事務局へ参加。

業務経歴：特別史跡・特別名勝平城京左京三条二坊宮跡庭園修理設計や特別史跡・特別名勝醍醐寺三寶院庭園保存修理事業などの史跡・名勝などの修理計画・実施設計など多数に従事。

コメント：文化財庭園の保存修理についてさらに深めていきたいと思っています。よろしく願いいたします。

氏名：安野肇(アンノ ハジメ)

出身：静岡県焼津市

経歴：平成7年3月、京都造形芸術短期大学ランドスケープデザインコースを卒業。卒業後、植彌加藤造園株式会社に勤務。現在、同社取締役。

業務経歴：国立京都国際会館の植栽管理・国立京都国会図書館等の施工等にかかわる。現在、関西文化学術研究都市記念公園の指定管理業務を兼務。

コメント：これまで、工事等の予算管理を主に仕事をしてきたので、学会への入会を機に庭園についての勉強もしていきたいと思っています。

■編集後記

京都もようやく冷え込みはじめ、遅れていた紅葉もすすんでまいりました。前号で予告いたしました関西大会の詳細プログラムをお届けいたします▼閑院宮邸跡はこの春に整備が完成し、庭園の美しさが蘇りました(学会ニュース52号をご参照願います)。また復元された邸宅内部では京都御苑の歴史や庭園文化に関する資料展示も行われています。近衛邸跡庭園も境界柵が改良され、より間近に庭園を鑑賞することができるようになっていきます。以前見学なさった方も、是非見学会に足をお運び下さい▼公開シンポジウム、研究発表会も本学会にとって重要なテーマがとりあげられています。多数のご参加により活発な討議となることを願っています。なお、会場等準備の都合上、12月2日までに参加申し込みをお願いいたします。関西大会には学会員以外の方も参加できます▼本号から全4回の集中連載「庭園探訪」がはじまりました。また、会員の方々から見学会や事業の開催報告をお寄せ頂きました。今後さらに会員の活動をニュースでご紹介していきますので、記事の投稿や情報提供をお願いいたします▼次号は平成19年2月中旬発行予定です。54号への記事投稿は1月末日までにお寄せ下さい。

■学会ニュースへの投稿は下記宛にお願いします。記事等はフロッピーディスクまたはCDにテキストファイルで保存してお送りください。

なお、現在e-mailによる投稿もできるように準備中です。しばらくお待ち下さい。

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116

京都造形芸術大学日本庭園研究センター気付

日本庭園学会 広報委員会「学会ニュース」係

編集長/仲 隆裕 編集・構成/今江 秀史

協力/栗野 隆、大澤 伸啓、高瀬 要一

日本庭園学会広報委員会

委員長/仲 隆裕 委員/今江 秀史・吹田直子

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116

京都造形芸術大学日本庭園研究センター気付

日本庭園学会関西支部事務局 FAX(075)791-9342